

天声人語

19世紀ロシアの文豪ゴーリキイの喜劇に『検察官』があり、浅ましい人物ばかりが出てくる。なかでも市長は、まちを訪れた男を検察官だと勘違いし、自宅に招いて必死にもてなす。自分に後ろ暗いところがあるため、調べられているのではと心配なのだ▼豪華な食事に上等の酒、口からはお追従、さらに金も握らせる。政治家が検察官を恐れ、それゆえ丸め込もうとするのは古今変わらぬ習性かもしれない。トランプ大統領の場合、そのやり方は懐柔というより押さえつけである▼自分の元選挙顧問が禁錮7~9年を求刑されたことに対し、先日のツイッターで「不公平」などと批判した。その後、あろうとか検察当局は求刑を軽くする判断をした。担当検察官の一人が司法省を辞任したというから圧力への抗議であろう▼介入の露骨さはトランプ氏ほどではない。そう言ってみても何の慰めにもならないのが安倍政権である。東京高検の検事長の定年を延ばしたのは、政権に近いこの人物を検察トップまで持っていくための布石ではないか、との疑惑が持ち上がっている▼カジノ汚職や公職選挙法違反など、自民党議員に対して検察のメスが入る事件が相次いでいる。検察首脳人事を思うがままにすることで、何かご利益を期待しているのだろうか▼冒頭の喜劇では最後に本物の検察官が現れ、市長たちが真っ青になる。腐敗がただされると期待できそうな終わり方だ。そんなオチがつかない現実がもあるなら、本当の悲劇である。

2020・2・16